

ひつじ草（睡蓮）

——「ソネネブルーム日花」について——

吉野 政治

〔要旨〕 睡蓮は花の開閉が定時に行われる「日花」（ソネネブルーム（蘭語））と呼ばれるもののひとつであり、ひつじの刻（午後一時から三時）に花を閉じる。別名「ひつじ草」はそこからきたものであるが、この花について書かれた文献が初めて現れる江戸時代において、その時間を開花時間とするものがあり、今日もそのように説明する植物図鑑もある。これは漢籍の文章の誤読と和語「つぼむ」の語義の誤解によるもののようにある。

〔キーワード〕 ひつじ草・睡蓮・日花・花時計

1 花時計

もっとも早く日本に西洋の植物学を紹介した宇田川榕菴の『植学啓原』（天保四年1833刊）に「花鐘^{はなかね}」という項目がある。次のような内容である。

花の開閉に定まった時があるものを「日花」（ソネネブルーム）と言う。その「日花」に三種ある。その一は「陰晴日花」と呼ばれるもので、花の開花で天気を占うことができる。例えば西別里^{シベラ}撰^{せしべり}鷺^{あさぎ}薊^{あざみ}は夜の十二時（子刻）に花を閉じれば翌日は必ず晴れ、閉じなければ雨となる。その二は「廻帰線日花」と呼ばれるもので、この花は毎朝咲き、日暮れには閉じる。その三は「昼夜平分日花」^{ジャガタラ}と呼ばれるもので、花の開閉は定時に行われ、瓜哇水仙のように晴雨にかかわらず少しもずれることがない。花の開閉を見て、時間を知ることができるので、西洋の好事家は庭に花

壇を作り局しきりを設けて、いろいろな時間に開閉するこの類の花を植えて時間を知る。これを「花鐘はなとけい」（花時計）という。

牧野富太郎著『続植物記』（昭和二十一年1947刊）に英国の花時計の一例が紹介されている（「花物語」）。

午前 一時	ノゲシ	花 閉ず
二時	バラモンジン属一種	花開く
三時	オックス・タンゲ	花開く
四時	キクヂシャ	花開く
五時	セイヨウタンポポ	花開く
六時	ヤナギタンポポ属一種	花開く
七時	ルリハコベ	花開く
八時	オオマツヨイグサ	花 閉ず
九時	パープルビンドウイド	花 閉ず
十時	ノミノツヅリ属一種	花開く
十一時	オオアマナ	花開く
十二時	バラモンジン属一種	花 閉ず
午後 一時	スベリヒユ属一種	花開く
二時	ルリハコベ	花 閉ず
三時	リュウキンカ属一種	花 閉ず

四時	キクヂシャ	花 閉ず
五時	ヒツジグサ属一種	花 閉ず
六時	カワホネ属一種	花 閉ず
七時	オオマツヨイグサ	花開く
八時	セイヨウタンポポ	花 閉ず
九時	ヒロハヒルガオ	花 閉ず
十時	パープルビンドウイド	花開く
十一時	ヨルザキムシトリナデシコ	花開く
十二時	ハイアオイ	花開く

日本では開花時期については花暦が作成されたが、このような一日の中の花の開閉に注目した花時計は作られたことはないようである。ただ、特定の花については見頃の時刻に細かい注意が払われてきた。例えば貝原益軒の『花譜』（元禄七年1694序）には、

蓮（中略）六月初より日を逐てひらく。花は卯の時の後より巳の時にいたりて漸ひらけ、午の後に漸合ふ。毎日かくのごとし。其花両日ありて三日をたもたず。唐蓮は少はひさし。ひらかんとしていまだひらかざる時、花観賞すべし。

牡丹（中略）東坡が曰、牡丹をみるに、午前よし。午後にはつづむ。篤信今案ずるに、牡丹をみるに巳のときをよしとす。巳より後はひらけすぎ、花の精神をとろへちからなし。うるはしからず。午後より後にみるは、牡丹をしらざるなり。

と見える。あるいは「午時紅 瓶史に出たり。篤信曰、倭俗に午時花といふ。（中略）日中に花ひらく。故名づく」また「合歓 其葉暮にいたればとづ。故に夜合と云。ねぶりの木と云も此故なるべし」とあるように、その名によって、改めてその植物の生態に目が向けらることもあった。

西洋のもののように詳細な花時計は花の生態に詳しい人々の協力を得なければできないであろうが、我々の身近にある草花からも、大まかな花時計を作ることとは可能である。宇田川榕菴も右の著で「竜胆、野西瓜苗、馬蘭、の類、其の花大抵朝開き暮に合ふ。其の他、沼菊、午時花、玉簪、浮薔など、日花と名づくべきもの甚だ多し」と言い、牧野富太郎も「アサガオ、ハスなどは夜明けがたに花を開き、オオマツヨイグサ、マツヨイグサ、ツキミソウ、ヨルガオなどは夕暮れに花を開く。そしてスベリヒユ、マツバボタンなどは晴天の午前九時頃から花を開

くのであるが、雨天には、咲くはずの蕾もなまけてなかなか開かない。マツバギクなどは雨天には休んでいる」と観察している。

牧野富太郎が挙げているオオマツヨイグサ、マツヨイグサ、ツキミソウが夏の夕暮れの定まった時刻（およそ六時半ころ）に開くことは植物学者ではない我々もよく知るところである。京都ではヒノクレソー（日の暮れ草）とも呼ばれ、長野ではユーハンソー（夕飯草）、山形ではママタキバナ（飯炊き花）、千葉・山口ではユーゲシヨーパーナ（夕化粧花）という地方名を持つ。大正ロマン溢れる美人画を描いた竹久夢二の、

待てど暮らせど来ぬ人を

宵待草のやるせなさ

こひは月も出ぬさうな

という歌の「宵待草」は夢二の出身地の岡山方言である。いずれも夕刻に咲くことから名づけられたものである。ちなみに植物学でツキミソウというのは嘉永四年（1851）に園芸用として渡来した白花を言い、我々に親しい黄花の月見草はその白花のツキミソウと同時期に輸入されたマツヨイグサと明治初年に輸入されたオオマツヨイグサが大正時代以降に野生化したもので

あると言われる。『牧野日本植物図鑑』（昭和十五年 1940 刊）

の「つきみさう 一名つきみぐさ」の項に「往時嘉永時代ニまつよひぐさ等ト同時ニ伝来セシト雖モ性弱キ為メ遂ニ野生状態トナラズシテ了リ現時ハ世間殆ンド之レヲ見ザルニ至レリ。世俗往々おほまつよひぐさヲ以テつきみそウト呼ブハ非ナリ。和名ハ月見草ノ意ニシテ花弁白ク且薄暮ニ開花スルヲ以テ之レヲ夕月ニ比シスク称セシナリ」とある。

ところで、我が国にヨーロッパの花時計のようなものが成立しなかったのは、日本における植物に対する関心が中国の本草学や花譜が記す範囲を超えるものではなかったことが理由の一つであるように思われる。中国の本草学にせよ花譜にせよ開花の時期については詳しく記されているが、時刻まで記したものは極めて少ない。本稿で取り上げる睡蓮については極めて例外的にその閉花時刻について触れられたものがあるが、江戸時代において既にその文章を誤読するものがあり、おそらくはその誤読に基づいてこの花の開閉時刻は誤解されつづけているありさまである。あるいは「睡蓮」という名がその誤解を生じている一つの原因であるのかもしれない。しかし、蓮 (*Nelumbo nucifera Gaertn.*) と睡蓮 (*Nymphaea tetragona Georgi.*) と

は別種である。

2 ひつじ草（睡蓮）はひつじの刻に開くのか閉じるのか

英国の花時計の中に午後五時に花を閉じるヒツジグサ属の一種があったが、日本の「ひつじ草」も未刻（午後一時から三時）に花を閉じるところから付けられた名である。このことは貝原益軒『大和本草』（宝永六年 1709 刊）に

睡蓮

ヒツジグサハ京都ノ方言ナリ。此花ヒツジノ時ヨリツボム。苳菜ノ葉ニ似タリ。西陽雜俎及本草綱目萍蓬草ノ下ニ唐ノ段公路北戸録ヲ引ケリ。夏秋花サク。花白クシテ数重ナリ。蓮ニ似テ小ナリ。其葉如レ苳。其花夜ハツボミテ水中ニカクル。昼ハ又水面ニウカブ故ニ睡蓮ト云。（下略）

と見え、越谷吾山『物類称呼』（宝暦五年 1775 刊）にも、

著 あさぎ一名すつぽんのかがみ …（中略）…

今按に 苳は苳菜の類 夏に至りて黄色の花を花ひらく 一種白花なるもの有り 睡蓮といふ 京都に ひつじぐさ と云 是なり 未ノ剋よりつぽむ

ゆへに名とす。(下略)

と見える。このように我が国において「睡蓮」が記された極早い時期の文献では正しく睡蓮の閉花時刻が認識されている。ちなみに右の文章に書かれているようにヒツジグサはもと京都の方言であるが、現在も京都市では確かに未刻ころに閉じる。本稿末の写真【写真①】は今年六月八日(旧暦四月二十六日)に京都市内の同志社女子大学校内の池で撮影したものである。

ところが、その未刻にひつじ草は開花すると説明するものがある。その説は早く『和漢三才図会』(正徳二年1712自序)に、

睡蓮すいれん 俗云ヒツジグサ「龜蓮」。又云ヒツジグサ「羊草」。

本綱睡蓮即萍蓬カハホネ之類也。葉如アサザ荇而大。其花布フ葉數重。

当レ夏昼開レ花、夜縮入レ水、昼又出。

△按睡蓮池中有レ之花大寸余。如ニ白蓮状一。昼未時一時開レ花。故名ニ羊草一。

と見え、『本草葉名備考』(延宝六年1679刊)にも

ヒツジグサ 睡蓮。北戸録(に云く)葉水面ニ浮ブ。大サ一寸許リ、カウホ子ニ似テ短シ。小イビツニシテ一方ニ切コミ有。葉ノ脈蓮ノ如シ。水面ニ浮ンデ大サ一寸余ナリ。茎水中ニ在テ見エズ。白色四弁ヅ、重リ、十六弁有。未ノ

剋比ヨリ日ニ映ジテ開キ、暮陰ニ萎ム。

とあり、『古今要覧稿』(文政四年1821〜天保十三年1842撰進)にも

此花夕陽八つ時頃より開く故、ひつじぐさといへり。暮に水中に入又明日未の刻より開く事四五日也。されども全く沈にはあらず。暮に至りてつぼむ故、沈といへり。

此の花八ッ時比より開きて暮に合して明日の八ッ時頃開けども晴天ならざれば開かず。雨天はさら也。

と見える。すなわちヒツジグサは昼の未ゆふの刻(「八ッ時」)から花を開き、夕方に花を閉じると理解されているのである。こうした誤解は現在にも踏襲され、『原色牧野植物図鑑』(昭和五十七年初版)でも「和名は、未の刻、今の午後二時」頃に開くから。しかし一定ではない」とある。

3-1 誤りの原因① 昼と夜の理解

ひつじ草（睡蓮）の花は未刻に開花するとする誤りは、漢籍のみで理解しようとしたことに原因があるようである。あるいは実際に花を観察しても漢籍の説明を優先したために起きたものようである。しかもそれは誤読による理解であった。具体的には二つの言葉の解釈を誤ったようである。

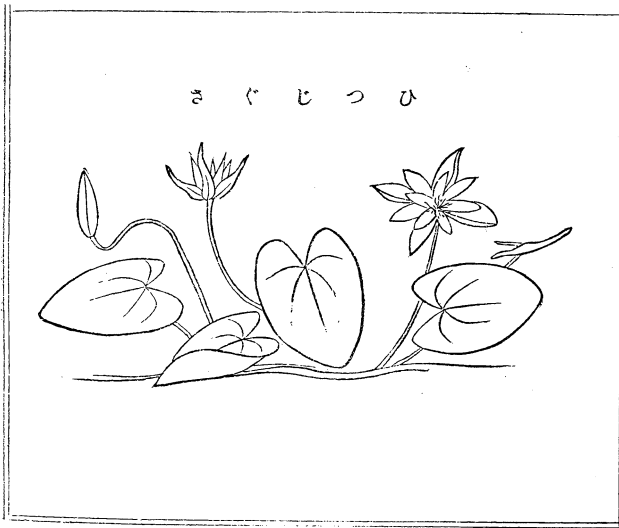
一つは「昼」「夜」という語の理解である。漢籍の文章を改めて掲げれば次のとおりである。

『北戸録』（唐・段公路著。本文は景印文淵閣『欽定四庫全書』による）

睡蓮葉如_レ荇而大。沈_二於水面_一、上有_二異浮根菱_一耳。其花布_二葉数重_一。不_レ房而藥。凡五種色。当_二夏昼_一開、夜縮入_二水底_一、昼復出也。与_二夢草_一昼縮入_レ地、夜即復出_二一_一。何背哉。

『酉陽雜俎』（唐・段成式著。本文は景印文淵閣『欽定四庫全書』による）

睡蓮 南海有_二睡蓮_一、夜則花低入_レ水。屯田章郎中從_二事南海_一親見。



【ひつじぐさの図】（『古今要覧稿』より）

『本草綱目』（明・李時珍著。一五七八年成。本文は崇禎十三年重訂本による）

萍蓬草（中略）集解時珍曰（中略）又段公路北戸録有

睡蓮、亦此類也。其葉如荇而大。其花布葉數重。當夏

昼開花、夜縮入水、昼復出也。

『秘伝花鏡』（清・陳湔子著。一六八八年成。本文は平賀源内補刻文政十二年刊による）

睡蓮〈布葉間昼開夜縮入水、次日復起。生南海〉

これらの文章における「夜」と対で用いられている「昼」は、日の出から日の入りまでの明るい時間帯を意味する。『広雅』釈詁四に「昼、明也」とあり、『説文』に「昼、日之出入与夜為介」とあって『徐灝段注箋』（『大漢和辞典』による）に「自日出至日入、通謂之昼、故云日之出入与夜為界也。今人但謂日中為昼、非古義」と説明される「昼」である。右に引用した『徐灝段注箋』に書かれているように、中国語においても「昼」が正午頃を指すことがあるが、日本語のヒル（昼）もまた、日の出から日没までの太陽が空にある間を意味することも、特に正午を中心に前後二、三時間を意味すること

もある。そして「ひつじ草」の名のもとなった未刻といつた時刻制度に関わる場合は後者の意味で理解されやすいようである。太陽が南中し翌日再び南中するまでの時間を十二等分する定時法では午刻（午前十一時から午後一時）あたりがその「昼」が指す時間帯にあたるが、昼間と夜間をそれぞれに六等分する不定時法では「昼」という語は特別の用いられ方をする。すなわち、「六つ基準」と呼ばれる時刻法では昼夜をそれぞれ「九つ」「八つ」「七つ」「六つ」「五つ」「四つ」の六つに分かれる。したがって一日に二つの「九つ」から「四つ」があることになる。そこで「曉・明・朝・昼・夕・暮・夜」の語を冠してその区別がなされる。「明六つ」から「夕七つ」までが明るい時間帯であり、「暮六つ」から「曉七つ」までが暗い時間帯である。

曉	九つ	八つ	七つ
明	六つ		
朝	五つ	四つ	
昼	九つ	八つ	
夕	七つ		
暮	六つ		

夜 五つ 四つ

この「六つ基準」と呼ばれる時刻法では正午からの二つの時を特に「昼」と呼ぶのである。ちなみに本稿末に掲げた写真を撮った日の二日前の芒種の日の「暁・朝・昼・夕・暮・夜」それぞれの始まりを現在の時刻に換算すると次のようになる（橋本万平『日本の時刻制度 増補版』塙書房刊、一三二頁）。

暁 午後十一時四十分から
 明 午前三時四十九分から
 朝 午前六時二十六分から
 昼 午前十一時三十九分から
 夕 午後四時五十三分から
 暮 午後七時三十分から
 夜 午後八時五十三分から

こうした「六つ基準」に用いられる「昼」の意味で漢籍の説明を理解すると、睡蓮すなわちひつじ草は太陽が南中した後の未刻に開花することになるわけである。

3-2 誤りの原因② 「つぼむ」の意味

ひつじ草は未刻に花を開くとする誤りの、もう一つの原因は「つぼむ」の意味の取り方にあるようである。ひつじ草という名が睡蓮の京都方言であることを述べた益軒の『大和本草』には「此花ヒツジノ時ヨリツボム」とあり、また吾山の『物類称呼』には「未ノ刻よりつぼむ」とあった。この「つぼむ」には荅と窄の二つの意味がある。小学館の『日本国語大辞典』（初版・第二版ともに）の説明を利用すれば、

つぼむ【蕾・荅】〔自・マ・四〕

つぼみになる。花が開く前の蕾の状態でいる。蕾が出る。

（源氏物語、山家集、右京太夫集、徒然草、日葡辞書からの用例が挙げられているが略す）

つぼむ【窄】〔自・マ・五（四）〕

狭く小さくなる。また、開いているものが閉じる。つぼまる。すぼむ。

尋常小学読本（明治三十六年）三・一「よるになると、つぼんでしまひます」

雪国〈川端康成〉「その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のように」

*方言 花などがしばむ。しおれる。福島県若松、新潟県中頸城郡、山梨県南巨摩郡奈良田、広島県高田の二つである。漢籍の「昼」の意味を誤って理解した者は、それに合わせて「つぼむ」の意味を「花が開く前の蕾の状態である」の意味に取ったものと思われる。また、『古今要覧稿』に「暮に水中に入（中略）。されども全く沈にはあらず。暮に至りてつぼむ故、沈といへり」とあったが、『北戸録』に「夜縮入水底」などとある「縮」を「つぼむ」の意味に誤解しているようでもある。

ちなみに、『日本国語大辞典』は窄の意味の「つぼむ」の用例には明治以降のものだけが挙げられているが、既に江戸時代の文章に見られることは本稿で示したとおりであり、『倭訓栞』（谷川士清 1709-1776 編纂）にも「つぼむ 括字の意」とある。

4 蓮と睡蓮

古代インドの聖典『リグ・ヴェーダ』にも白花と青花の二種類の蓮が出てくるが、T・C・マジュブリア氏によると白花は *Nelumbo niefiera* という蓮と推定され、青花は睡蓮の仲間の *Nymphaea esculenta* であると推定されるといふ（ネパール・インドの聖なる植物 蓮」、三浦功大編『蓮の文華史』かど創房所収）。仏典でも例えば『仏説阿弥陀經』に「極樂国土には七宝の池あり。（中略）池中の蓮華、大いさ車輪のごとし。青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光ありて、微妙・香潔なり」とあるが、『織田仏教大辞典』によると「天竺（インド）に四種の蓮華あり。一に優鉢羅華（ウトバラ）、二に拘陀利華（クムダ）、三に波頭摩華（パドマ）、四に芬陀利華（フンダリカ）、次第の如く青黄赤白の四色なり。また泥盧鉢羅（ニロバラ）を加えて五種となす。総じて蓮華となす」とある。このうち赤と黄の花を咲かす二種以外は蓮華とは確定できなものであり、蓮博士の大賀一郎博士は「サンスクリットから漢訳するときに解らずにみんな蓮にしてしまった」のだからという（「ハスの話」、『大賀一郎 ハスと共に六十年』所収

日本図書センター一九九九年十二月刊)。つまり、古代インドでは蓮と睡蓮とを区別しなかったものであり、睡蓮そのものが存在しなかった中国の北地方においては、その区別のしようがなかったようである。前掲の『北戸録』『西陽雜俎』『本草綱目』『秘伝花鏡』の睡蓮の説明はそうした背景で理解する必要がある。『西陽雜俎』に洛陽の役人屯田韋郎中が「南海」（上海の地であろうと言う）に赴任した時に、夜になると水中に潜る蓮を確認したと書かれているのは、「夜則花低入_レ水」という生態を持つ「蓮」は洛陽の人々にとって余程興味惹かれるものであったことを示すものであろう。おそらく、このことから「睡蓮」という名は生まれたものと思われる。和名のヒツジグサが花を閉じる時間に注目した命名であるのと対照的である。

しかし、ヒツジグサという名もまた、その命名の背景には蓮との関係があるように思われる。そのように推測する理由は以下のとおりである。

我が国でも睡蓮は古代には存在しなかったようである。ヌナハ（沼縄）という語が上代の文献に見られるが、『本草和名』（深根輔仁撰、延喜年間成立）に「萼 和名奴奈波_{（ななは）}」とあり、ジエンサイ（*Brasenia Schreberi* J.F. Gmel.）の_{（ななは）}とあ

て、睡蓮ではないとされる。一方、蓮（蓮華）は「日下江の入江のはちす 花はちす」（『古事記』雄略天皇条）など早くから文献に現れる。汚泥の中から見事な花を咲かし、葉に置く露は穢れない玉となるその美しさは極楽往生の表象でもあり、

今日よりは露の命を惜しからず蓮の上の玉と契れば

（拾遺和歌集・一三四〇）

一たびも南無阿弥陀仏と言ふ人の蓮の上にのぼらぬはなし
（同右・一三四〇）

極楽のはちすの花のうへにこそ露のわが身はおかまほしけれ
（続詞歌和歌集・四六六）

など和歌に多く歌われている。中国に倣った観蓮の風流も行われ、その初出は『続日本紀』光仁天皇の宝亀六年（_{（725）}）八月十二日条の「始設_{（しりぞ）}蓮葉之宴」であり、奈良時代に遡る。このような蓮花や蓮葉の露の美しさを観賞しようとする時には見頃の時間が計られることになる。

朝ごとに開きてぞ見つる池水のはちすにむかふ花のとぼそを
（為忠家初度百首・六八二）

たたまりて蕊まだ見せぬ葩のぬれ色きよし蓮の朝露

（志濃夫舎歌集・二八五）

吹く風に露もこぼさぬ蓮の葉の花に朝日の光まばゆき

(藤簍冊子・七六三)

あさぼらけ池のはちすや咲きぬらんこすのまとほる風にほ

ふなり

(為家五社百首・二二二)

先に引用した貝原益軒の『花譜』の観察も、こうした愛蓮家のこだわりの一例と捉えられる。しかし、「唐蓮は少はひさし」と益軒が言うように、今日我々が目にすることの多い蓮ですら四日間しか花はもたない【写真②】。愛蓮家が最も見頃とする二日めには午前九時ころには満開になり、十二頃には閉じてしまう。その短さは、

夕暮れの風をすずしとねぶるまに蓮の一花散りつくしけり

(草徑集・八五六)

咲けば散る蓮の花びら見るまきたぐひもありと星にたむ

けん

(六帖詠草・七四三)

と和歌にも詠われ、

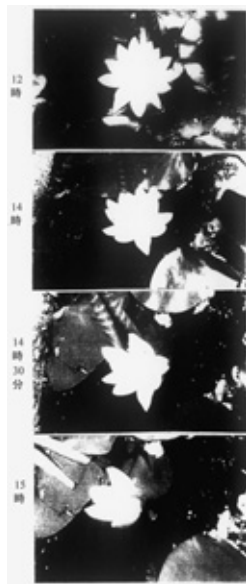
ひらいたひらいた れんげの花がひらいた

ひらいたと思ったら 一つのまにかつぽんだ

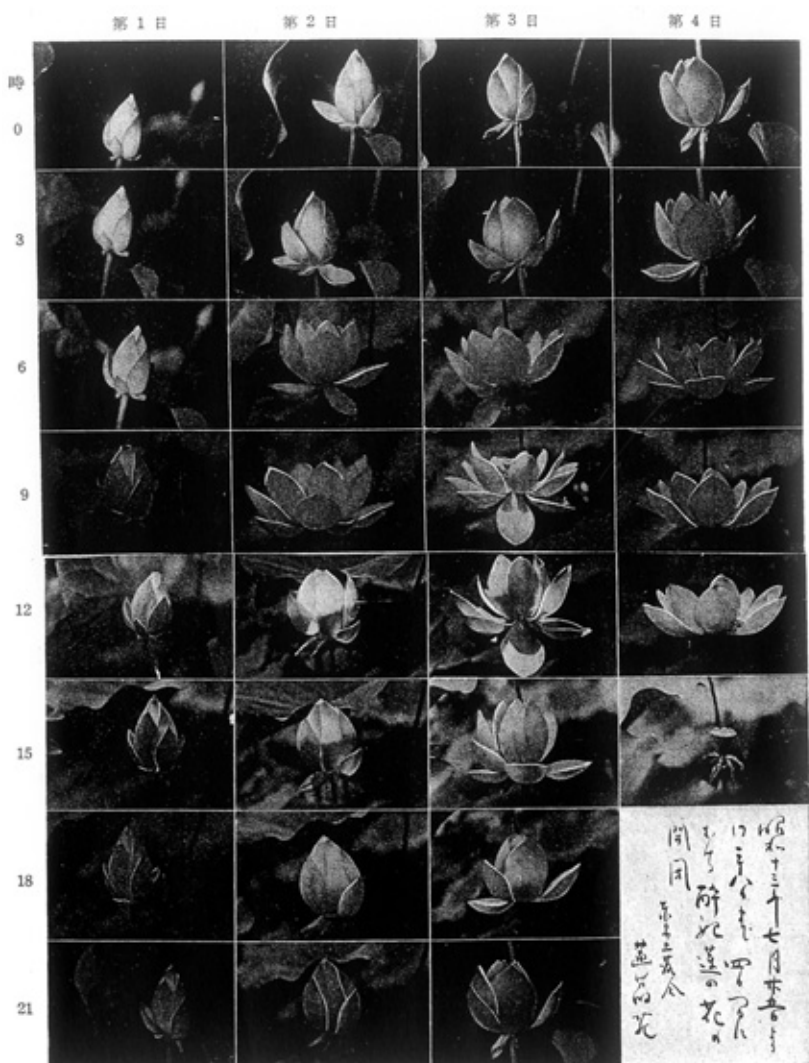
と童謡にも歌われる。

睡蓮の花はこの蓮(蓮華)より少し後の時間に閉じ始める。

睡蓮がヒツジゲサと名づけられたのは、蓮華の閉花時間との比較によるのであらうと思われるのである。



【写真①】睡蓮の閉花時間（筆者撮影）



【写真②】蓮華の開閉時間（大賀一郎著『ハスを語る』忍書院刊より）